

「文化系」学生のレポート・卒論術

(青弓社, 2013)



勝 又 雄

本書は、主に大学の文系学部において、文化論やメディア論、あるいはコミュニケーション論等を学んでいる“文化系”学生を対象として書かれている。全体の内容は4つのパートで構成されており、レポートや卒論の書き方や情報収集の方法等だけではなく、その材料として役立つようなコンセプトやトピックについても幅広く取り上げられている。各パートについては、各領域の専門家たちによって、現代の社会的文化的潮流を見据えた実践的な視点から、ユーモアたっぷりのコラムも交えつつ構成されており、初学者にもわかりやすく、理解しやすい内容となっている。

近年にかけて、大学生のレポートや卒論、この前段階となる事前準備に関する知識や技術の低下が顕著である。この状況は学生の自己責任と一言で切って捨てられるものではない。その背景には、そもそも、レポートや卒論を書くこと、また、書くためにどのような準備をする必要があるのかといった点について、しっかりと学ぶことのできる教育の機会が減少していることも原因の一つとして挙げられる。一方、スマートフォン等のメディアの普及によるインターネット検索やSNSの常用化によって、学生た

ちは玉石混交の情報の渦のなかにあり、日常生活を取り巻く何かに興味関心はあるけれども、数ある材料の中からどれをピックアップしたら良いか、レポートや卒論を通じて読者に対して、何を、どのようにして伝えたら良いか戸惑っている姿が見て取れる。

記号論の研究者であり、小説家でもあるウンベルト・エーコは、著書『論文作法』のなかで、論文を書くことを「潜在的には君は人類宛てに一冊の本を書いたのだ」(エーコ, p.172)という言葉で表現した。たとえ専門的な内容であったとしても、読者として想定される、あらゆる誰かに向かって、わかりやすく、伝わる言葉で、自分の考えを記述していくことの大切さを説いているのである。本書では、文章作成にあたっての知識や技術だけではなく、上述したような“心構え”を身に着ける必要性についても様々な視点から論じられている。たとえば、パート1では、鶴見俊輔が「いい文章の三つの条件」として、「誠実さ」「明晰さ」「わかりやすさ」を挙げていると指摘されているが、こうした文章を書くにあたって、書くことに向き合う姿勢や倫理観というものは、まずもって学生が学ぶべきことに他ならないだろう。

また、自分の考えを文章化していくために最も必要なことは、本書の各所で触れられている「批判的な視点」である。現代日本における、特に若者たちのコミュニケーション上の特徴として、多少納得がいかななくても肯定し、周りに同調することが美徳、優先されるべきであるといったような雰囲気が見られる。その場では、〈否定すること＝批判すること〉は同一視され、忌避される傾向にある。文章を書く、あるいは読むといった局面においても、書き手としては読み手から批判されることを恐れ、読み手としては書き手を批判すること（傷つけてしまうこと）を恐れているようである。しかしながら、否定することと批判することは意味が全く異なる。本書では、批判的な視点や、その姿勢をもってして自分の考えをまとめ、文章を生み出していくことは、対象となる相手の論点を明確に理解した上でなされる新しい考えを生み出すための技術であると述べられている。こうした論点は、学生たちが具体的にレポートや卒論を作成するための前段として、最も大切なことを教えてくれている。

さて、このような心構えや視点をもって具体的な執筆作業に入っていくわけだが、どんな内容を書いたらいいかわからないという学生にとっては、本書のパート2からパート3が参考になるだろう。ここには現代文化を読み解いていくための鍵となる様々なコンセプトやテーマが実践的な視点から論じられている。「音楽」「ファッション」「スポーツ」「食」等、それぞれの文化に向けられる学生たちの「ここ、ちょっと興味あるかも」といった曖昧な関心を、少しずつ、学究的かつ具体的な関心に変えていくため

のエッセンスがここには盛り込まれている。また、構築された関心や自分の考えを実際に文章化していくにあたり、その根拠となる資料の収集方法については、パート4が参考となる。本、新聞、雑誌、インターネットなどの各種メディアからのデータ収集から、各種調査方法までの概要が列挙されている。

いわゆる“文化系”の学生にとって、現代日本の日常は、現代文化について考える材料で溢れかえっている。だが、その材料があまりに多すぎるためか、学生たちは受け手側としての立ち位置に終始し、せっかく芽生えた気づきを具体的な表現に結びつけていくことができていないように思える。こうして批評などしている私自身も、この点については、実はそれほど自信がない。10年程前、まだ大学院生だった頃、自分の考えが上手くまとまらず、レポートやブログにはその考えのままを叩きつけるようにして綴るものだから、どうしても長文雑文になってしまい、本書の編者である渡辺潤先生からは何度もご指導いただいた。「ライフスタイルも、文章も、シンプルにわかりやすく」。そこに自然と誠実さも宿ってくる。今、それが出来ているかどうかと問われると怪しいものであるが、渡辺先生と、一風変わった渡辺ゼミのメンバーから受け取ったメッセージである。

本書は、こうした気づきに向き合い、解釈し、自分の考えを交えた具体的な文章を作る技術に繋げていくための手助けをしてくれる本である。レポートや卒論の作成に困っている、あるいはちょっとした関心や疑問を持っているけれど、文章表現の方法がわからないといった学生たちに、ぜひ手に取ってもらいたい一冊である。